

接頭辞型複合動詞の上代における様相

阿部 裕 (中部大学非常勤講師)

要旨

複合動詞の発達は日本語の特色とされる。複合動詞の歴史を描くことは日本語史を明らかにする上で重要である。現代日本語の複合動詞には前項が接頭辞であるものが複数存在するが、それらの歴史の変遷について明らかになっている部分は非常に少ない。接頭辞型複合動詞の歴史を構築するためには、各時代における様相の記述がまず必要である。本稿ではその一環として、上代における接頭辞型複合動詞の様相をまとめる。まず、先行論を踏まえて「取る」を前項とする「トリー」、「打つ」を前項とする「ウチー」の様相を確認する。その後「搔く」を前項とする「カキー」、「刺す」を前項とする「サシー」、「引く」を前項とする「ヒキー」、「押す」を前項とする「オシー」の様相について考察する。そして、上代においては「トリー」「ウチー」に比べて「カキー」「サシー」「ヒキー」「オシー」の接頭辞型複合動詞としての使用は未発達であることを明らかにする。

1 はじめに

日本語では「動詞連用形＋動詞」形の複合動詞が数多く使用される。影山(2013)は、種々の研究¹から「動詞＋動詞型の複合動詞はアジア一特に、東アジアから南アジアにかけて一の諸言語に集中して見られ」(p. iv) とした上で、「東アジア地域の中でも、日本語の複合動詞は数と種類において他の言語を凌駕しているように見える」(同)と述べる。これが事実であれば、複合動詞の発達は日本語の特色のひとつということになる。

現代日本語の複合動詞体系が歴史的にどのように出来上がってきたのかを明らかにすることは、日本語史研究における重要な課題である。従来の複合動詞史研究は金田一(1953)以来の〈古代語に複合動詞は存在したか〉という問題が中心であったが、この問題については青木(2013)でひとまずの決着を見たといつてよい。今後の複合動詞史研究に求められるのは、個々の複合動詞の歴史の変遷の記述を蓄積することである。それにより、複合動詞史をより具体的かつ詳細に描くことができる。

本稿では、複合動詞史構築の一環として、『万葉集』、『古事記』歌謡・『日本書紀』歌謡(以下、記紀歌謡)、『続日本紀』宣命を資料とし、前項の動詞連用形が接頭辞となっている複合動詞(以下、接頭辞型複合動詞)の上代における様相を記述する。

2 接頭辞型複合動詞

石井(2007)は現代語の「語彙接頭辞構造」の複合動詞を構成する前項として「打ち」「押し」「搔き」「差し」「突き」「たたき」「取り」「引き」「ぶち」「踏ん」「立ち」を挙げる。本稿ではこのうち、先行論のある「トリー」「ウチー」に加え、新たに「カキー」「サシー」「ヒキー」「オシー」の4種を取り上げる²。この4種を考察対象とするのは、いずれも現代語の接頭辞型複合動詞の構成要素となっていること、古代語(特に中古語)において豊

¹ 詳細は影山(2013)を参照されたい。

² 以下、「トリ」は前項動詞のみ、「トリー」は「トリ＋動詞」を指す。「カキ」なども同様。

富な用例が採集されること、基本的な動作を表す2音節の他動詞であることなど、「トリ」「ウチ」と共通の特徴を有するためである。これらについて考察することは、現代語の接頭辞型複合動詞体系の成立過程を明らかにするための端緒として重要である。

接頭辞型複合動詞が古代から存在したことは疑いないが、その歴史の変遷には不明な点が多い。接頭辞型複合動詞は中古の王朝古典作品を中心に古代語において多用されるが、その一方、現代日本語では新たな接頭辞型複合動詞の生産はほとんど行われていない。したがって、接頭辞型複合動詞は日本語史のいずれかの時点において盛んに生産・使用されるようになり、いずれかの時点で生産・使用が減少に転じたことになる。そのため、接頭辞型複合動詞の歴史を明らかにするためには、まず次の(1)について知る必要がある。

- (1) a. 接頭辞型複合動詞はいつ・どのように成立し、いつ・どのように増加したのか。
b. 接頭辞型複合動詞はいつ・どのように減少したのか。

(1)を明らかにするには、接頭辞型複合動詞の各時代における様相の記述を蓄積し、その変遷の概要を捉えなければならない。しかし、接頭辞型複合動詞に関する歴史的な先行論は、中古の平仮名文学を中心にしたものは少なからず存在しているものの、それ以外の時代については未だ乏しいのが現状である。特に、まとまった量の日本語文献が残る最古の時代である奈良時代に関しては、「トリー」「ウチー」以外の先行論は極めて少ない。

この欠を補うため、本稿では上代の接頭辞型複合動詞の様相を記述する。まず先行論を踏まえ「トリー」「ウチー」の様相を確認し、その後「カキー」「サシー」「ヒキー」「オシー」の様相について述べ、それぞれの差異を明らかにする。これは複合動詞史構築の一部を成すものであり、接頭辞型複合動詞の通時の変遷を記述する出発点となるものでもある。

なお、以下で実例を見るに当たって、前項が実際の動作を表すのか、あるいは接頭辞であるかの判断は、目的語の有無や文脈などを総合して行う。しかし、複合動詞前項が接頭辞であるか否かの判断は現代語においてすら難しいものであり、上代語においてはその判断が困難な場合が非常に多い。その際は、十分な根拠なしに断定することは避け、判断を保留する。判断を避ける例が多くなるが、明らかに接頭辞と考えられる例がどの程度存在するのかを示すだけでも、本稿の目的は十分に果たされる。

3 上代の「トリー」と「ウチー」

上代の接頭辞型複合動詞に関する先行論として、「トリー」を扱った阿部(2011)、「ウチー」を扱った阿部(2018)がある。まず、これらを踏まえて上代の「トリー」「ウチー」の様相を簡単に確認しておこう。

3.1 上代の「トリー」

3.1.1 概要

阿部(2011)は『万葉集』の「トリー」を①「トリ」+自動詞で目的語を伴うもの、②「トリ」+自動詞で目的語を伴わないもの、③「トリ」+他動詞で目的語と二格を伴うもの、④「トリ」+他動詞で目的語のみを伴うもの、⑤「トリ」+他動詞で目的語を伴わないもの5種類に分け、複合動詞の有無を中心に考察したものである。ここでは、阿部(同)

の記述をまとめると同時に、若干の新たな考察も加え、上代の「トリー」の様相を示す。

阿部（2011）に示した『万葉集』中の「トリー」に記紀歌謡と『続日本紀』宣命に見られる例も加えると、上代の「トリー」は以下の32種98例になる。（（）は用例数。以下同）

トリ上ぐ（1）、トリ与ふ（2）、トリ置く（2）、トリ負ふ（4）、トリ掛く（4）、トリ替ふ（3）、トリ枯らす（1）、トリ着る（3）、トリ来（2）、トリ探る（1）、トリ敷く（1）、トリ垂づ（2）、トリ統べ持つ（1）、トリ添ふ（下二段活用）（2）、トリ束ぬ（1）、トリ付く（四段活用）（3）、トリ付く（下二段活用）（3）、トリ尽くす（1）、トリ続く（下二段活用）（2）、トリつづしろふ（1）、トリとどこほる（1）、トリ撫づ（1）、トリ靡く（1）、トリ並め懸く（1）、トリ佩く（8）、トリ離す（1）、トリ見る（7）、トリ向く（2）、トリ食す（1）、トリ持つ（29）、トリ装ふ（5）、トリよろふ（1）

阿部（2011）も踏まえ、上代における「トリー」の主な特徴を（2）にまとめる。

- (2) a. 前項「トリ」が取る動作を表すことが明白な例は少ない。
- b. 前項「トリ」を接頭辞と見るべき例が複数存在する。
- c. 目的語とニ格補語を伴う例が複数存在する。
- d. 意味的に熟合している「トリ持つ」が存在する。

3.1.2 前項が取る動作を表す「トリー」

前項「トリ」が実際の取る動作を表していることが明白な例として、ここでは「トリ来」と「トリ枯らす」を挙げる。この他の「トリー」にも前項が取る動作を表すものが存在する可能性はあるが、前項が動作を表すのか接頭辞であるかの判断が困難な例が多い。

- (3) 青淵に蛟竜トリ来む（蛟龍取将来）劍大刀もが（万葉集・巻16・3833・境部王）
- (4) 上枝は鳥居枯らし 下枝は人トリ枯らし（比登登理賀良斯）（古事記・43番歌謡）

3.1.3 前項を接頭辞と見るべき「トリー」

自動詞を後項とし、前項「トリ」の動作対象が存在しない「トリー」は、その前項を接頭辞と見るべきである。

- (5) 唐衣裾にトリ付き（須宗尔等里都伎）泣く子を置きてぞ来のや母なしにして（万葉集・巻20・4401・他田舎人大嶋）
- (6) 年月は流るるごとしトリ続き（等利都々伎）追ひ来るものは（万葉集・巻5・804・山上憶良）
- (7) 衣手にトリとどこほり（取等騰己保里）泣く子にもまされるわれを置きていかにせむ（万葉集・巻4・492・舎人吉年）

他動詞を後項とする「トリー」においても、以下のような前項「トリ」が何らかの物体を取る動作を表すと考えにくいものについては、接頭辞と見てよいと思われる。

- (8) 国にあらば父トリ見まし（父刀利美麻之）家にあらば母トリ見まし（母刀利美麻志）

(万葉集・巻5・886・山上憶良)

(9) 妻別れ悲しくはあれど大夫の心振り起しトリ装ひ (等里与曾比) 門出をすれば

(万葉集・巻20・4398・大伴家持)

3.1.4 目的語とニ格補語を伴う「トリー」

他動詞を後項とする「トリー」には目的語とニ格補語を伴うものが数多く見られる。「トリ持つ」28例中16例、「トリ佩く」8例中6例がニ格補語を伴うほか、「トリ懸く」「トリ添ふ」「トリ向く」「トリ付く」「トリ垂づ」にも同様の例がある。

(10) 手束弓手にトリ持ちて (手尔取持而) 朝狩りに君は立たしぬ棚倉の野に

(万葉集・巻19・4257・船王)

(11) ますらをの心振り起し劍太刀腰にトリ佩き (腰尔取佩) 梓弓鞆トリ負ひて

(万葉集・巻3・478・大伴家持)

(12) 木綿だすき肩にトリ懸け (肩荷取懸) 斎瓮を斎ひ掘り据ゑ

(万葉集・巻13・3288)

これらは一見「トリ」が「手にする」という動作を表しているかのように見える。ただ、「トル」に伴うニ格には、「手に」「沖辺に」のように動作の位置や場所を表すもの、「網取りに」「我妹子に見せむがために」のように動作の状態や目的を表すものがある。しかし、これらをすべて合わせてもニ格を伴うものは97例中の11例に過ぎず、「トル」がニ格を伴うことは決して多くはない(阿部2011, p.3)という事実から、「トリ持つ」「トリ佩く」などの前項「トリ」は単独使用時と同様の手にする意を表す他動詞としては機能しておらず、接頭辞である可能性もあると考えられる。いずれにせよ、上代においては「トリー」に目的語だけでなくニ格補語も加えた表現が、ある種の類型になっていたようである。

3.1.5 熟合的な「トリ持つ」

意味的に熟合している「トリ持つ」は、以下のような例である。

(13) 大君の任きのまにまにトリ持ちて (等里毛知氏) 仕ふる国の年の内の事かたね持ち

(万葉集・巻18・4116・大伴家持)

この「トリ持つ」は「政事を行う」「とりまとめる」といったような意味で使用されており、これは「トル」「持つ」の単純な複合では生じない意味である。このような「熟合構造」(石井2007)の「トリ持つ」は、少なくとも意味的には明らかに複合動詞となっている。熟合構造の「トリ持つ」は、(13)の他にも『万葉集』に1例、宣命に1例確認できる。

3.2 上代の「ウチー」

3.2.1 概要

阿部(2018)は、上代の「ウチー」をⅠ類(ウチ+他動詞)、Ⅱ類(ウチ+意志的自動詞)、Ⅲ類(ウチ+非意志的自動詞)に分け、その様相を記述したものである。ここでは、阿部

(同) を踏まえて上代の「ウチー」の様相を確認しておく。

阿部(2018)に示した『万葉集』と記紀歌謡の「ウチー」に、『続日本紀』宣命に見られる例も加えると、上代の「ウチー」は以下の39種100例になる。

ウチ出づ(3)、ウチ寄す(1)、ウチ置く(1)、ウチ掛く(2)、ウチ交ふ(1)、ウチ着す(1)、ウチ懲ます(1)、ウチ霧らす(1)、ウチ臥い伏す(1)、ウチ越ゆ(7)、ウチさらす(2)、ウチしなふ(1)、ウチ偲ぶ(1)、ウチすするふ(1)、ウチ付く(下二段活用)(1)、ウチ嘆く(5)、ウチ鳴す(1)、ウチ撫づ(1)、ウチ靡く(31)、ウチ濡らさゆ(1)、ウチのぼる(1)、ウチ放つ(1)、ウチはなふ(1)、ウチ羽振く(1)、ウチ延ふ(2)、ウチ嵌む(1)、ウチ払ふ(6)、ウチ降る(3)、ウチ触る(1)、ウチ滅ぼす(1)、ウチ見る(1)、ウチ廻る(1)、ウチ群る(2)、ウチ止む(1)、ウチ行く(5)、ウチ寄す(1)、ウチ渡す(5)、ウチ治む(1)ウチ折る(1)

阿部(2018)も踏まえ、上代における「ウチー」の主な特徴を(14)にまとめる。

- (14) a. 前項「ウチ」が打つ動作(打撃)を表すものが少なからず存在する。
- b. 前項「ウチ」を接頭辞と見るべき例が複数存在する。
- c. 移動動詞を後項とする例がまとまって存在する。

3.2.2 前項が打撃を表す「ウチー」

前項が打つ動作を表す「ウチー」とは、前項「ウチ」の打撃対象となり得る名詞句が存在し、意味的にも「ウチ」が打撃を表すと解釈できるものである。かような例は、多くはないものの複数見られる。

(15) 太秦は神とも神と聞こえくる常世の神をウチ懲ますも(宇知岐多麻須母)

(日本書紀・112番歌謡)

(16) 時守のウチ鳴す鼓(打鳴鼓)数みみれば時にはなりぬ逢はなくも怪し

(万葉集・巻11・2641)

3.2.3 前項が接頭辞である「ウチー」

接頭辞であることが明らかな「ウチー」は以下のようなものである。(17)はI類、(18)はII類、(19)はIII類の例である。

(17) 我が宿の冬木の上に降る雪を梅の花かとウチ見つるかも(打見都流香裳)

(万葉集・巻8・1645・巨勢宿奈麻呂)

(18) 昼暮らし夜わたし聞けど聞くごとに心つごきてウチ嘆き(宇知奈氣伎)あはれの鳥と言はぬ時なし

(万葉集・巻18・4089・大伴家持)

(19) ウチ霧らし³(打霧之)雪は降りつつしかすがに我家の苑に鶯鳴くも

(万葉集・巻8・1441・大伴家持)

³ 鶴久、森山隆編『万葉集』(おうふう)では「ウチキラヒ」と訓読されるが、「ウチキラン」と訓むのが一般的であると思われる。

打撃の対象が存在せず、また文脈上も打撃の意は合わないことから、これらの前項「ウチ」は接頭辞と見るべきである。Ⅰ類からⅢ類のすべてにおいて接頭辞である例が確認できることから、接頭辞「ウチ」は既に広く用いられていたと考えられる。

3.2.4 移動動詞を後項とする「ウチー」

移動動詞を後項とする「ウチー」は次のようなものである。

(20) 塩津山ウチ越え行けば (打越去者) 我が乗れる馬ぞつまづく家恋ふらしも
(万葉集・巻3・365・笠金村)

(21) 浜辺より我がウチ行かば (和我字知由可波) 海辺より迎へも来ぬか海人の釣舟
(万葉集・巻18・4044)

かような「ウチー」は目的語が存在しないことから、前項が接頭辞であるかのように見えるが、前項「ウチ」は本来は「馬を鞭打つ」意を表していた可能性がある。詳細は阿部(2018)を参照されたい。

4 上代の「カキー」

ここまで、先行論を踏まえて「トリー」「ウチー」について確認した。ここからは、「カキー」以下の考察に入る。その際、阿部(2018)と同様に後項動詞の性質(他動詞・意志的自動詞・非意志的自動詞)によって分けて述べる。

4.1 「カク」の特徴

「カキー」について見る前に、前提として「カク(搔く)」が単独で動詞として使用される際の用法を確認しておく。「カク」は基本的に他動詞として使用されるが、『万葉集』においては用法が固定的であり、「カク」9例のうち「眉根」を目的語とするものが7例、「搔きは梳らず」と「搔きも梳らず」が各1例となっている。

(22) 月立ちてただ三日月の眉根カキ (眉根搔) 日長く恋ひし君に逢へるかも
(万葉集・巻6・993・坂上郎女)

(23) 朝寝髪カキも梳らず (可伎母氣頭良受) (万葉集・巻18・4101・大伴家持)

4.2 「カキー」の概要

『万葉集』と記紀歌謡から、「カキー」は18種27例得られた(宣命には用例が確認できず)。「トリー」や「ウチー」と比較すると、異なり語数・延べ語数ともに少ない。

カキ数ふ(2)、カキ霧る(1)、カキ棄つ(1)、カキ探る(1)、カキ垂る(1)、カキ着く(1)、カキ付く(下二段活用)(1)、カキ取る(1)⁴、カキ投ぐ(1)⁵、カキ撫

⁴ 「我が妻も絵にカキ取らむ(晝尔可伎等良無)暇もが」(万葉集・巻20・4327)。「搔く」ではなく「描く」意での使用と思われるが、「搔く」と「書く/描く」はもともと同語であったと考えられるため、ここに含めた。

⁵ 原文「汗可伎奈氣」(万葉集・巻9・1753)。解釈には諸説あるが、ここでは伊藤(1996)に従い「汗搔き投げ」と解釈する。

づ(6)、カキ掃く(2)、カキ弾く(1)、カキ廻る(1)、カキ向く(1)、カキ結ぶ(1)、
カキ^{おだ}抱く(1)、カキわく(3)、カキ渡る(1)

大部分が他動詞を後項とするが、「カキ渡る」「カキ霧る」のように意志的自動詞、非意志的自動詞を後項とする例もある。以下、それぞれに分けて実例を見ていく。

4.3 他動詞を後項とする「カキー」

他動詞を後項とする「カキー」は、前項が搔く動作を表すと考えられるものが多い。

- (24) 夢の逢ひは苦しかりけりおどろきてカキ探れども(搔探友)手にも触れねば
(万葉集・巻4・741・大伴家持)
- (25) しかとあらぬひげカキ撫でて(比宜可伎撫而)我れをおきて人はあらじと
(万葉集・巻5・892・山上憶良)
- (26) 大伴の御津の松原カキ掃きて(可吉掃互)我れ立ち待たむ早帰りませ
(万葉集・巻5・895・山上憶良)
- (27) 葦垣の末カキ分けて(末搔別而)君越ゆと人にな告げそ事はたな知れ
(万葉集・巻13・3279)

「カキ探る」は人を手さぐりで探す動作であり、前項「カキ」はその際の手の動きを表していると考えられる。「カキ撫づ」は6例あり、今回得られた「カキー」で最多である。「搔く」と「撫でる」は動作として非常に類似しており、前項「カキ」も撫でる際の手の動きを表していると思われる。「カキ掃く」は2例見られ、前項「カキ」がゴミなどの物体をかき集める動作を表していると考えられる。「カキ分く」は現代語にも「掻き分ける」として残っている。これも、前項「カキ」は手で障害物を避ける様子を表しているであろう。このように、前項「カキ」が実際の搔く動作を表す例は複数見られる。

一方、「カキ数ふ」の前項は接頭辞の可能性はある。

- (28) 秋の野に咲きたる花を指折りカキ数ふれば(可伎数者)七種の花
(万葉集・巻8・1537・山上憶良)
- (29) カキ数ふ(可伎加蘇布)二上山に神さびて立てる母の木
(万葉集・巻17・4006・大伴家持)

(28)の「カキ数ふ」は指を折って花を数えるという動作である。花が「搔く」という動作の対象であるとは考えにくいことから、前項「カキ」は接頭辞と見こともできる。ただし、指を曲げるという点では「搔く」という動作と共通し、前項「カキ」がその様子を表している可能性も否定できないため、断定は避けたい。いずれにせよ、(24)～(27)とは異なるタイプである。

4.4 意志的自動詞を後項とする「カキー」

意志的自動詞を後項とする「カキー」は少ない。ここでは「カキ渡る」の例を挙げる。

- (30) 朝なぎにいカキ渡り（伊可伎渡）夕潮にい漕ぎ渡り久方の天の川原に
（万葉集・巻8・1520・山上憶良）

これは天の川を「カキ渡る」という文脈であり、後の「漕ぎ渡る」とも併せて考えれば、「カキ」が川を渡るために楫などで水を掻く動作を表している可能性が高い。

意志的自動詞を後項とする「カキ―」として、他に「カキ廻る磯の埼落ちず」（古事記・5番歌謡）、「手舄に虻カキ着き」（古事記・97番歌謡）がある。いずれの前項「カキ」も、単なる接頭辞の可能性もあるが、「カキ廻る」は（30）と同様に水を掻く意、「カキ着く」はしがみつく意を表していると考えられる⁶。

4.5 非意志的自動詞を後項とする「カキ―」

非意志的自動詞を後項とする「カキ―」は「カキ霧らす」のみであった⁷。

- (31) カキ霧らし（掻霧之）雨の降る夜を霍公鳥鳴きて行くなりあはれその鳥
（万葉集・巻9・1756）

「カキ霧らす」は「霧が出ている」というような意味であると思われる、「カキ」が何らかの具体的な動作を表しているとは考えにくい。前項は接頭辞と考えられる。

5 上代の「サシ―」

5.1 「サス」の特徴

「サス（刺す／指す／差す）」は、何らかの物体を刺す（もしくは、刺すことによって設置する）意、場所などを目指す意、日など光が差す意など、多様な用法がある。自動詞的な用法もあるものの、多くは他動詞として用いられている。

- (32) 橋のほへる園に霍公鳥鳴くと人告ぐ網ササましを（安美佐散麻之乎）
（万葉集・巻17・3918・大伴家持）
- (33) 若の浦に潮満ち来れば瀉をなみ葦辺をサシて（葦邊乎指天）鶴鳴き渡る
（万葉集・巻6・919・山部赤人）
- (34) 朝日サス（朝日指）春日の小野に置く露の消ぬべき我が身惜しけくもなし
（万葉集・巻12・3042）

5.2 「サシ―」の概要

『万葉集』と記紀歌謡において、「サシ―」は13種23例確認できる。宣命からは得られ

⁶ 「カク」には「岩カキかねて（伊波迦伎加泥豆）我が手取らすも」（古事記・69番歌謡）のように「とりすがる、しがみつく」といったような動作を表す例がある。「岩カキかねて」は他動詞、「虻カキ着き」は自動詞であるが、動作としては類似しており、何らかの関係がある可能性もあるだろう。また、「カク」には同じ形態の動詞として「懸く／掛く」があり、「しがみつく」「とりすがる」意の「カク」は「懸く／掛く」との関連も視野に入れる必要があるかもしれない。

⁷ 『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂）は「霧らす」を「霧ルが他動詞的な語尾スをとったもの」とする。「霧ラス」は自動詞「霧ル」に対する他動詞とされる場合が多いが、(31)のように実際の用法は自動詞的であるため、ここでは非意志的自動詞の例として扱う。

なかった。異なり語数・延べ語数ともに「カキー」と同程度であり、「トリー」「ウチー」と比べると大幅に少ない。

サシ交ふ(7)、サシ下る(1)、サシ曇る(1)、サシ並ぶ(2)、サシ上る(2)、サシ佩く(1)、サシ枕く(2)、サシまく(1)⁸、サシ向ふ(1)、サシ焼く(1)、サシ寄る(1)、サシ渡す(2)、サシ渡る(1)

他動詞を後項とするものだけでなく、「上る」「下る」「渡る」といった意志的自動詞を後項とするものも見られる。「サシ曇る」は非意志的自動詞を後項とする。

5.3 他動詞を後項とする「サシー」

前項「サシ」が動作を表すことが明白な例もあるものの、接頭辞か否かの判断が難しい例が多い。

- (35) 上つ瀬に鵜川を立ち下つ瀬に小網サシ渡す(小網刺渡) (万葉集・巻1・38)
 (36) 白袴の袖サシ交へて(袖指可倍互) 靡き寝し我が黒髪 (万葉集・巻3・481)
 (37) 素手抱き手抱きまながり眞玉手玉手サシ枕き(多麻傳佐斯麻岐)
 (古事記・3番歌謡)
 (38) サシ焼かむ(刺将焼) 小屋の醜屋にカキ棄てむ破れ蓆を敷きてウチ折らむ醜の醜手をサシ交へて寝らむ君ゆゑ (万葉集・巻13・3270)

「小網サシ渡す」は前項「サシ」が小網を設置する意を表していると考えられる。かような用法は単独の「サス」にも見られる((32)参照)。

「サシ交ふ」は「袖」「玉手」「手枕」などを目的語とし、いずれの例でも寝るという動作を伴って使用される。この「サシ交ふ」の前項が実際の動作を表すのか、あるいは接頭辞であるかの判断は難しい。単独の「サス」には「袖」「玉手」「手枕」を目的語とする例は見られないのだが、「サシ」に後接しない単独の「交ふ」が「袖」や「手枕」を目的語とする例は確認できる⁹。意味的にも、「袖交ふ」と「袖サシ交ふ」には大きな違いは無いと思われる。この点から、「サシ交ふ」は「交ふ」に接頭辞としての「サシ」が付されたもののように見える。しかし、意味的には前項「サシ」が(腕枕にするために)手や袖を相手の頭の下に差し入れる意を表わしている可能性も否定できない。接頭辞と積極的に判断できるほどの根拠がなく、「袖」「玉手」「手枕」を前項「サシ」の目的語と捉えることも可能であることから、「サシ交ふ」の前項「サシ」は接頭辞ではないと考えておきたい。

「サシ枕く」についても、「サシ交ふ」と同様に考えておく。

「サシ焼く」に関しては、「カキ棄つ」「ウチ折る」などと並列されている点から語調を整える接頭辞であるかのように見えるが、単独の「サス」には「鵜養が伴は行く川の清き瀬ごとに 篝サシ(可賀里左之) なづさひ上る」(万葉集・巻17・4011)のように火をつける意での用例も見られることから、単なる接頭辞ではない可能性がある¹⁰。

⁸ 「あしひきの八つ峰踏み越えサシまくる(左之麻久流) 心障らず」(万葉集・巻19・4164)。その意は未詳。

⁹ 「敷袴の袖交へし君(袖易之君)」(万葉集・巻2・195)、「遠妻と手枕交へて(手枕易)寝たる夜は」(万葉集・巻10・2021)。

¹⁰ 伊藤(1998)は(38)の「サシ」を接頭辞とするが、火をつける意を含む可能性も指摘する。

5.4 意志的自動詞を後項とする「サシー」

意志的自動詞を後項とする「サシー」のうち、次のような例では前項「サシ」が明らかに実際の動作を表している。

- (39) 夏の夜は道たづたづし船に乗り川の瀬ごとに棹サシ上れ (佐乎左指能保礼)
(万葉集・巻18・4062)
- (40) 朝なぎに楫引きのぼり夕潮に棹サシ下り (佐乎佐之久太理)
(万葉集・巻20・4360・大伴家持)
- (41) 真木積む泉の川の早き瀬を棹サシ渡り (竿刺渡) (万葉集・巻13・3240)

これらはいずれも棹をさして上る／下る／渡るという動作であり、前項「サシ」は棹をさして船を操る動作を表している。

これに対し、次の「サシ並ぶ」は前項「サシ」の目的語が存在せず、この例のみから断定することはできないものの、接頭辞の可能性がある。

- (42) サシ並ぶ (指並) 隣の君はあらかじめ己妻離れて乞はなくに鍵さへ奉る
(万葉集・巻9・1738)

5.5 非意志的自動詞を後項とする「サシー」

非意志的自動詞を後項とする「サシー」は、「サシ曇る」の1例のみである。

- (43) 鳴る神の少し響みてサシ曇り (刺雲) 雨も降らぬか君を留めむ
(万葉集・巻11・2513・柿本人麻呂歌集)

「サシ曇る」の前項「サス」は、その動作対象が存在しないことから、接頭辞である可能性がある。ただし、「サス」が雲に関して用いられる例として他に「八雲サス」があり、その存在には留意しておく必要がある¹¹。「八雲サス」は「出雲」にかかる枕詞で、その「サス」は「瑞枝サスなどといわれるサスと同じ意味で、勢いよく発ちのぼる意」(『時代別国語大辞典 上代編』)とされる。この解釈を採用する場合、「八雲サス」は多くの雲が立ちのぼる意となる。これと同様に考えれば、「サシ曇る」を「雲が勢いより立ちのぼり、空が曇る」意と捉えることもできる。このように、「サシ曇る」の前項「サシ」を雲が立ちのぼる意を表すと見ることも不可能ではないため、接頭辞と断定することは避けたい。

6 上代の「ヒキ―」

6.1 「ヒク」の特徴

「ヒク(引く)」は、何らかの物体を引っ張る意や弓を引く意の他動詞として用いられている例が多い。(46)のように、人を誘う意を表す比喩的な用法も見られる。

¹¹ 「八雲サス(八雲刺)出雲の子らが黒髪は」(万葉集・巻3・430・柿本人麻呂)。

- (44) 深海松の深めし子らを縄海苔のヒケば絶ゆとや (引者絶登夜)
 (万葉集・巻 13・3302)
- (45) 梓弓ヒカばまにまに (引者随意) 寄らめども後の心を知りかてぬかも
 (万葉集・巻 2・98・石川郎女)
- (46) 入間道の於保屋が原のいはみつらヒカばぬるぬる (比可婆奴流々々) 我にな絶えそ
 ね (万葉集・巻 14・3378・東歌)

6.2 「ヒキー」の概要

『万葉集』と『続日本紀』宣命から、「ヒキー」は 13 種 25 例得られる。記紀歌謡からは用例が得られなかった。異なり語数・延べ語数ともに「トリー」「ウチー」よりも少なく、「カキー」「サシー」と同程度である。

ヒキ植う (2)、ヒキかがふる (1)、ヒキかく (1)、ヒキこす (1)、ヒキそふ (1)、
 ヒキとどむ (1)、ヒキのぼる (1)、ヒキ放つ (1)、ヒキ干す (1)、ヒキ結ぶ (1)、
 ヒキ攀づ (6)、ヒキ率^るる (6)、ヒキ折る (2)

意志的自動詞を後項とする「ヒキのぼる」を除き、全て他動詞を後項とする。非意志的自動詞を後項とする例は見られない。

6.3 他動詞を後項とする「ヒキー」

他動詞を後項とする「ヒキー」は、前項「ヒキ」が引く動作を表していると考えられる例が大部分を占める。

- (47) なでしこを宿に蒔き生ほし夏の野のさ百合ヒキ植ゑて (佐由利比伎宇恵天)
 (万葉集・巻 18・4113・大伴家持)
- (48) 船に小舟ヒキ添へ (小船引副) 潜くとも志賀の荒雄に潜き逢はめやも
 (万葉集・巻 16・3869)
- (49) 妹が手を取りてヒキ攀ぢ (取而引与治) ふさ手折り我がかざすべく花咲けるかも
 (万葉集・巻 9・1683)

「ヒキ植う」は植物を引き抜いてきて植える意、「ヒキ添ふ」は船の傍に小舟を曳く意、「ヒキ攀づ」は植物を引っ張る意を表している。

現代まで残る「ヒキー」のひとつに「ヒキ率る」がある。現代語ではほぼ完全に一語化しており、「率いる」と表記されるが、本来は「ヒク」と「率る」が複合したものであり、本稿では他の「ヒキー」と同様に「ヒキ率る」と表記する。その「ヒキ率る」は、上代においては宣命から 6 例得られる。そのうち 2 例を挙げる¹²。

¹² 仮名書き例である (50) は確例といえるが、(51) のように「率」字で表記されているものは単独の「率る (キル)」との区別が困難であり、確例とは言い難い。「人^ヲ率^ル来^ス」(続日本紀・宣命第 33 詔) のように「率」には「キル」と訓読される例もある。なお、訓読は北川和秀編 (1982) 『続日本紀宣命 校本・総索引』(吉川弘文館) による。

(50) 故諸乃大法師等_平比岐為天

(続日本紀・宣命第41詔)

(51) 百官乃人等_率天

(続日本紀・宣命第12詔)

「ヒキ率る」は現代語と同様に人を引き連れる意で使用されている。単独の「ヒク」が人を引き連れる意を表す例は確認できなかったものの、「ヒキ率る」の前項「ヒキ」がそのような動作を表している可能性は高いだろう。

このように、他動詞を後項とする「ヒキー」においては前項「ヒキ」が動作を表す例が多く見られる一方、接頭辞と積極的に考えるべき例は1例も見られない。

6.4 意志的自動詞を後項とする「ヒキー」

意志的自動詞を後項とする「ヒキー」は次の1例のみである。

(52) おしてる難波の崎にヒキのぼる(引登)赤のそほ舟そほ舟に綱取り懸け

(万葉集・巻13・3300)

この例は「船を曳いて上る」という内容であり、前項「ヒキ」は船を引っ張る動作を表している。「ヒキ+意志的自動詞」においては、前項が接頭辞である例は見られない。

7 上代の「オシー」

7.1 「オス」の特徴

「オス(押す)」が単独で使用される例は非常に少ない。その用法としては、現代語と同様の押す意を表す場合だけでなく、(54)のように光が上から照る様子を表す場合もある。

(53) 官印_平押_天

(続日本紀・宣命第28詔)

(54) 春日山オシて照らせる(押而照有)この月は妹が庭にもさやけくありけり

(万葉集・巻7・1074)

7.2 「オシー」の概要

『万葉集』と『日本書紀』歌謡から、「オシー」は以下の6種31例得られた。「トリー」や「カキ」と比べて異なり語数・延べ語数ともに少ない。

オシ照る(17)、オシ靡ぶ(8)、オシねる(1)、オシ開く(3)¹³、オシ伏す(下二段活用)(1)、オシ分く(1)

7.3 他動詞を後項とする「オシー」

他動詞を後項とする「オシー」は、前項「オシ」が何らかの押す動作を表していると考えられるものがほとんどである。

¹³ 『万葉集』の仮名書き例では「意斯比良伎」(巻5・804)と「ヒ(甲類)」の仮名が使われているが、『日本書紀』では「於辞庭羅箇禰」(17番歌謡)と「ビ(甲類)」の仮名になっている。ここでは両者を単なる揺れと見て、同じ項目として数えた。

- (55) 婦負の野のすすきオシ靡べ (須々吉於之奈倍) 降る雪に宿借る今日し悲しく思ほゆ
(万葉集・巻 17・4016・高市黒人)
- (56) 娘子らがさ寝す板戸をオシ開き (意斯比良伎) い辿り寄りて真玉手の玉手さし交へ
(万葉集・巻 5・804・山上憶良)
- (57) 白雲の千重をオシ分け (知邊乎於之和氣) 天そそり高き立山
(万葉集・巻 17・4003・大伴池主)
- (58) 焼太刀の手かみオシねり (手願押祢利) 白真弓鞞取り負ひて
(万葉集・巻 9・1809)

(55) は雪がすすきを押し倒す様子、(56) では戸を開けるために押す様子、(57) では雲を左右に押しのける様子が表されており、文法的にも意味的にも「オシ」が接頭辞であるとは考えにくい。(58) の「オシねる」のみ前項「オシ」の機能が判然としないが、太刀を強く握る様を表すという解釈もあり(伊藤 1996)、「オシ」が何らかの動作を表している可能性はある。いずれにせよ、「オシ+他動詞」において、前項が接頭辞であると考えられるべき例は見られない。

7.4 非意志的自動詞を後項とする「オシー」

非意志的自動詞を後項とする「オシー」は「オシ照る」のみである。月が照る様子を表す際に用いられるほか、「難波」にかかる枕詞としても多用される。

- (59) 我が宿に月オシ照れり (月押照有) 霍公鳥心あれ今夜来鳴き響もせ
(万葉集・巻 8・1480・大伴書持)
- (60) 皇祖の遠き御代にもオシ照る (於之亘流) 難波の国に天の下知らしめしきと
(万葉集・巻 20・4360・大伴家持)

「オシ照る」の「オシ」が何らかの押す動作を表すとは考えにくいものの、(54) のように「オス」が単独でこの種の用法で用いられる場合がある点から、「オシ照る」の「オシ」を接頭辞と断じることにはできない。

8 まとめ

本稿で明らかにした事柄を、以下に簡単にまとめる。

- ・「トリー」…異なり語数・延べ語数ともに多い。前項を接頭辞と見るべき例は、意志的自動詞を後項とするものを中心に複数存在する。
- ・「ウチー」…異なり語数・延べ語数ともに多い。前項を接頭辞と見えるべき例がⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類のすべてにおいて存在する。
- ・「カキー」…異なり語数・延べ語数は「トリー」「ウチー」に比して少ない。前項を接頭辞と見るべき例は皆無ではないが、非常に少ない。
- ・「サシー」…異なり語数・延べ語数は「トリー」「ウチー」に比して少ない。前項が接頭辞であることが明らかな例は確認できない。

- ・「ヒキ一」…異なり語数・延べ語数は「トリー」「ウチ一」に比して少ない。前項が接頭辞であることが明らかな例は確認できない。
- ・「オシー」…異なり語数・延べ語数は「トリー」「ウチ一」に比して少ない。前項が接頭辞であることが明らかな例は確認できない。

このように、接頭辞型複合動詞の上代における様相にはばらつきがある。特に、用例数も多く接頭辞例も複数見られる「トリー」「ウチ一」とそれ以外の差が大きく、「カキ一」「サシ一」「ヒキ一」「オシー」においては明らかに接頭辞といえる例はほとんど見られない。これは、複合動詞史において注目すべき事実と思われる。

なぜ「トリー」「ウチ一」とそれ以外にかような差異が見られるのかについては、現時点では明確な答えを見出すことができない。意味用法の違い、構文環境の違いなど、いくつかの可能性が考えられるが、いずれにせよ古代語の共時的な様相を手掛かりとして多様な視点から丁寧に考察していく必要があるだろう。今後の課題としておきたい。

今回調査した文献は韻文と宣命のみであり、いずれも位相としてはやや特殊である。文献資料がほとんど残っておらず調査はできないものの、他の位相ではより多くの接頭辞型複合動詞が用いられていた可能性も無いとは言えない。しかしいずれにせよ、現存する文献から明らかにできる範囲では、接頭辞型複合動詞の上代における様相には上記のような差異があったと言える。

使用テキスト・索引

- ・古典索引刊行会編『萬葉集索引』（塙書房）
- ・鶴久、森山隆編『萬葉集』（おうふう）
- ・『日本古典文学大系 古代歌謡集』（岩波書店）
- ・北川和秀編（1982）『続日本紀宣命 校本・総索引』（吉川弘文館）

参考文献

- 青木博史（2013）「複合動詞の歴史的変化」影山太郎編『複合動詞研究の最先端一謎の解明に向けて』pp.215-241 ひつじ書房
- 阿部裕（2011）「上代日本語の動詞接続「トリー」について一複合動詞の存否を中心に一」『Nagoya Linguistics(名古屋言語研究)』5 pp.1-14 名古屋言語研究会
- 阿部裕（2018）「上代日本語における接頭辞を前項とする「ウチ一」」『Nagoya Linguistics(名古屋言語研究)』12 pp.1-14 名古屋言語研究会
- 石井正彦（2007）『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
- 伊藤博（1996）『万葉集釋注 五』集英社
- 伊藤博（1998）『万葉集釋注 七』集英社
- 影山太郎（2013）「はじめに」影山太郎編『複合動詞研究の最先端一謎の解明に向けて』pp.iii-ix ひつじ書房
- 金田一春彦（1953）「国語アクセント史の研究が何に役立つか」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』pp.329-354 三省堂